

ifの白兎の英雄譚

みんぐ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、あつたかもしれない物語。

静寂が育て、暴喰が夕餉を作り、大神が勇気を与える。

誰よりも優しい少年は——英雄を決意した。

——ぼくは最後の英雄になる。

目次

基本情報

基本情報

〜2巻

始まりと訪れと試験

入団試験①

入団試験②

最終試験

ロキ・ファミア

教育係

武器

初めてのダンジョン。初めての魔法。

1

5

8

13

19

24

29

31

33

基本情報

基本情報

・主人公

ベル・クラネル。アルフィアの妹であるメーテリアとゼウス・ファミリアの末端のサポーターの子供。白い髪に父親譲りの紅い瞳を持っている。心優しく、純粹。

・主人公の叔母

ヘラ・ファミリア幹部 レベル7【静寂】のアルフィア リヴァ
イアサンを倒すが元々患っていた、重病が悪化。妹の子供であるベル・クラネルの様子を見に、ベルの家まで足を運び、そのままベルと共に過ごす。超短文詠唱の名前を容赦なく誰にでも使うちよつと性格がキツイ人。灰色の髪と、灰色の瞳、翡翠色の瞳のオツドアイ。魔法を弱める効果のある漆黒のドレスを常に着ている。山奥のベルの家に行ったあとは、「変態ゼウスに背中を晒したくない。」という理由で改宗コンバージョンしなかったので、ステイタスは更新出来なかった。天性の才能を持ち、才禍の怪物とも呼ばれていて、他人の剣技を完璧に再現。模倣出来る。

ステイタス

L v. 7

力 : E 548

耐久 : G 202

器用 : S 999

敏捷 : S 999

魔力 : S S 1001

魔導 : C 耐異常 : E

魔防 : E

精癒 : E

覇光 : I

スキル

・才禍代償ギア・ブレンシング

ステイタス
能力の常時限界解除を約束する代わりに、交戦時及び発作時、『毒』『麻痺』『機能障害』を始めとした複数の『状態異常』を併発し、発動中は半永久的に能力値、体力、精神力の低下を伴い続ける。

・双分運命^{アルメー}

詳細不明。

・奏律曲光^{ヴェル・アルドレー}

詳細不明。

魔法

・【サタナス・ヴェーリオン】

詠唱【福音】^{ゴスペル}

音魔法。起動鍵は【炸響】^{ルギオ}

・【静寂の園】^{シレンティウム・エデン}

詠唱【魂の平穩】^{アタラクシア}

付与魔法。魔法効果無効。

・ジエノス・アンジェラス

詠唱【祝福の禍根、生誕の呪い、半身喰らいし我が身の原罪 禊^{みそぎ}はなく。浄化はなく。救いはなく。鳴り響く天の音色こそ私の罪
神々の喇叭^{らっば}、精霊の豎琴^{たてごと}、光の旋律、すなわち罪禍の烙印 箱庭に愛されし我が運命^{いのち}よ碎け散れ。私は貴様^{おまえ}を憎んでいる！ 代償はここに。罪の証をもって万物^{すべて}を滅す—— 哭け、聖鐘楼】

音魔法。大鐘楼を召喚。

・主人公と昔一緒にいた大きな男

ゼウス・ファミアリア幹部 レベル7 【暴喰】のザルド ベヒーモスを倒した際、ベヒーモスの毒に身を蝕まれて、オラリオから姿を消した。以後は死んだとまで言われていたが、実は主人公と共に過ごしていた。ゼウス・ファミアリアの中ではガレスのような立ち位置のようである。料理が得意である。

ステイタス

Lv. 7

力 : S 999

耐久 : S 999

器用 : S 902

敏捷 : C 673

魔力 : D 515

狩人 : D 耐異常 : E 破碎 : F 剛身 : F 覇撃 : I

スキル

・神饌デウス・アムプロシア恩寵

強喰増幅オーバーライト。内蔵機能の強化。

・冒力アル・クエスター冒身

詳細不明。

・肉蹂ニダル・グルメン肉塊

詳細不明。

魔法

・レーア・アムプロシア

詠唱 【父神ちちよ、許せ、神々の晚餐をも平らげること。貪れ、獄炎えんごの舌。喰らえ、灼熱の牙！】

詳細不明。

・主人公のおじいちゃん

ゼウス、好色なお爺さんでゼウス・ファミリアの主神。神威を消してベルと話していた。神話では雷霆を操るらしい。英雄を求めている。

・ゼウス・ファミリア

黒竜に敗れて、オラリオから追放されたとされている元最強のファミリア、レベル8の団長【英傑マキシム】を筆頭にかなりの強者がいた。

・ヘラ・ファミア

黒竜に敗れて、オラリオから追放されたとされているファミア。
昔はゼウス・ファミアと双璧をなしていた。レベル9の団長【女帝】
を筆頭に実力者揃いのファミアだった。

く2巻

始まりと訪れと試験

「……ここが、！」

オラリオ。

ベル・クラネルは目を輝かせながらそう呟いた。

ヒューマン、アマゾネス、獣人、ドワーフ、それから憧れの妖精族^{フェアリー}。多種多様さまざまな種族が入り交じり、町は活気を見せている。その身の丈よりも大きい長杖^{ロッド}を装備した小人族^{バルサム}や、大戦斧を装備した。ドワーフ。ベルにとっては全てが新鮮で、興奮の対象だった。

「……行こう。」

今は亡きお義母さんの想い。それは英雄になることだ。遙か昔、古代ではダンジョンから溢れ出したモンスターが地上を侵略し、それはそれは多くの血が流れたそうだ。今となってはダンジョンには蓋がされ、迷宮はむしろこの迷宮都市^{オラリオ}の、いや人類の利益になりつつあるんだけど。……とにかく、その昔溢れ出したモンスターの中で、とりわけ強力で、多くの被害を出しているものがある。それが三大モンスター。

その身に毒をまとい、上級冒険者でさえ喰らったら死を免れない
陸^{ベヒーモス}の王者

海に棲み、圧倒的な破壊力を持って全てを壊し尽くした海^{リザアササン}の霸王

……そして、今なお生き永らえ、黒き終末、生ける災厄ともよばれる隻眼の黒竜。

あのお義母さん達でも倒せなかった黒竜化け物を僕が倒せるの？と思わなくもないけど、それでも僕は、英雄になると決めたんだ。

あの日の笑顔と、お義母さんの願いのために。



「ぜ、全滅、、、」

35戦、35敗。

ファミリア入団を願ったが、どこも断られてしまった。

一応お義母さんから剣の手解きを受けてはいる。元冒険者だったお義母さんはめちやくちや強くて、その母から手解きを受けた自分も弱くはない、筈。しかし成長途中のこの小柄な身長、それにヒューマンという種族を考えれば、仕方の無いことなのかもしれない。

「ロキ・ファミリアに行こう。」

本当は行きたくなかった、、、というかお義母さんが嫌ってたファミリアだけど、やはり迷宮に潜るには神ファールナの恩恵が必要だし、そもそも神ロキ自体に悪感情は無いし、と。ロキ・ファミリア本拠地ホーム、黄昏の館に行くことにした。



「すみません。少しいいですか？」

「なんだ、入団希望者か？」

黄昏の館に訪れると、槍をもった門番が気さくに笑いかけてくる。この人は外見で判断する人じゃなくて良かった。と安堵を胸に抱く。

「そうです。ロキ・ファミリアに入りたくて」

「わかった。入ると良い。」

そうして、僕は黄昏の館の敷地に入った。
ーののだが、

「人多、!？」

人が多い。ロキ・ファミリアとはここまでの規模なのか？と大勢の人間でいっぱいになっている黄昏の館の中庭で戸惑っていると、

「おい、ここはガキの遊び場じゃねえぞ。帰れ」

剣呑さを隠そうとしない声色で猫^{キャットピープル} 人の男性が話しかけてきた。

「ここにはロキ・ファミリア入団希望者が数多く集まっている。おれもその1人だ。半年に1回訪れるこの日の為に都市最大派閥に入ろうと努力するやつが今この場に山ほどいるんだよ。」

今日が半年に一度の入団試験日だったんだ。。と半ば驚いている僕を裏腹にこちらを睨みつけながら、男はそう捲し立てる。「だから。」とさらなる言葉を重ねようとしたとき、それを強制的に遮るよう大きな、はつきりとよく通る声がこの中庭に響いた。

「これから入団試験に関する説明を行う」

不思議な声だった。僕よりも小柄で愛想よく笑うその姿とは裏腹にこの場にいる誰よりも強者としての圧倒的な存在感がある。そして聞くだけで心が奮い立つような、勇気の湧いてくるような、そんな不思議な声だった。

「ここにいる40人程度の入団希望者は、この中庭で戦ってもらおう。」

入団試験①

「本気か、フィン？」

翡翠色の美しい髪を長く伸ばしたその王妖精——オラリオの誇る第1級冒険者の1人、リヴェリア・リヨス・アールヴはそう問いかけていた。

「入団試験者への乱戦闘技、この方式では、恩恵の持たない者に勝ち目が無い。それに、受験者にレベル2がいた場合その者が勝つてお終いだろう。」

片目を瞑り、真意を問いかけているその声に金髪に碧眼をもった小人族の勇者は反論する。

「僕たちのファミリアも余裕が無い。入団試験と銘打ってはいるが、この試験はロキ・ファミリアに入りたい冒険者を諦めさせるもののためだ。後進育成なら間に合っている。この試験で誰かを採用するつもりは、今のところない」

勇者、フィン・デイルムナはそう言つてのけた。ファミリアの財政、ロキ・ファミリアに入りたい者に仮初の——形だけの機会を与えようというのだ。

「採用する気がない、か。」

リヴェリアは、目を細めながらフィンという言葉を口にする。冒険者を、入団試験希望者を騙すような真似を潔癖なエルフは許さない……だが彼女は常のエルフよりも柔軟であり、ファミリアの切迫した状況、そして不満を持った冒険者の理性の無さを知っている。頭ごなしに叱り、止める真似はしなかった。その代わりにもうひとつ問いを重ねる。

「入団者の中で、とりわけ優秀、入団に値すると判断したものは入団の機会を与える。最低限の筋は通すべきだ。」

「ソー、そうだね。有望な者は採用する。絶対的に全員を落とす訳では無いよ。それこそロキの目に叶う第2級冒険者なんか来たら採用は確実だろう。」

第2級冒険者なら1次試験も通るだろう…という指摘は喉の奥に押しこんで、リヴェリアは始まる試験を想像した。

「どのような試験になるか・・・」

△ △ △ △

黄昏の館、中庭。

そのど真ん中でベル・クラネルは細く、装飾の少ない剣を構えていた。灰色の柄の剣を握るその姿に緊張はなく、目を瞑って落ち着いていた。対して、ほかの受験者はベルの周りを離れるかのようにいる。当然だ。40人がいつせいに戦闘を始める乱戦においては、いかに後半まで生きる残るかが肝となる。よって好き好んで中庭のど真ん中に居座ろうとしないのである。大抵は端の方にいることで背後からの警戒をゆるめる。

——そんな中、中庭のど真ん中に居座るベル・クラネルはやはり異質だった。

周囲からの視線を一切意に介さず、この場にいるベル・クラネルの真意は――

（あと数分で試験は始まる。わざわざど真ん中に陣取った意味だけど、やっぱりこれは試験な以上、試験監督者に認めて貰うわなきやダメだろう）

――監督者へのアピールの為だった。

後半まで残るのが当たり前かのようなその思考は傲慢にようでもある。しかしそんなことは気づかず、ベルは精神統一をする。

（大丈夫。落ち着こう。見たところ本当に強そうな人は周りにはいない。あの猫キャットピール人の男性は強そうだったけど、それでも今周りにはいない。）

「用意はいいかい？ 1次試験、スタートだ。」

突然発せられた声はこちらの注意を引き付け、唐突に始まりの合図を告げる。その声が聞こえた瞬間、一瞬の静寂とともに、冒険者の雄叫びが聞こえた。

「「うおおおおお!!」」

続いて聞こえるのは、武器と武器が弾ける鋼の音。バチバチと戦いの火花は散らされている。

「くたばりやがれ!」

口の悪いドワーフの戦士が狼ウエファウルフ人の男性に大きな斧を叩きつける。それを必死に避け、戦ううちに今度はドワーフの男性が別の男性剣撃を喰らい、苦しみ喘いでいた。

完全な乱戦だ。誰が誰を攻撃してるのかもわからず、ただ近くにいる人を攻撃し、必死に避け、防御する。誰もが余裕と正気を失い戦っていた。

——そんな戦いの中で、ベル・クラネルの動きは常軌を逸していると思われるほど神がかった。

「」

背後から振り下ろされる——恩恵ステイタスの刻まれた身から放たれる——荒々しく、重たい剣撃。それを恩恵ステイタスの刻まれていない身でありながら、音だけで感じとり、身体を少し傾けるだけで回避。そのままベルの身体は駒のように回転し流れるように相手の身体を切り裂く。

「——後ろ。前。左。」

うわ言をつぶやくかのように無意識に放たれるその言葉。その言葉通りに振り下ろされる槌、大剣、そしてこちらの心臓を一突きにしようとする細剣^{レイピア}。3方向から迫る武器は、一見すると逃げ場などないように見える——否、逃げ場などないのだ。逃げ場などないのにも関わらず、ベルはその状況を覆してみせる。自身の持つ剣を、目の前から迫り来る細剣^{レイピア}の底に添わせる。そうして方向補助^{ナビゲート}するかのように自分の剣を使って、相手の細剣を見当違いの方向にずらす。

「うおっ!？」

体勢を崩した男を盾に迫り来る剣撃をかわす。そうしてベル・クラネルは1人、また1人と、この乱戦^{バトルロワイヤル}闘技に脱落者を増やしていく。

「次だ」

△ △ △ △ △

——勇者^{フレイバー}、フィン・ディムナは、目の前の光景——正確には少年の技と駆け引きを信じられずにいた。

その理由は、見るからに恩恵を持たない人間が恩恵を刻まれた人間と渡り合っているからでも、複数の敵から囲まれた状況を傷1つ付かず凌ぎ切っているからでもない。

驚くべくは、少年の剣筋、足運び、体勢、全てに見覚えがあるからだ。

——それは、長い神時代^{しんじだい}の中でも最強のファミリア

——それは、全冒険者の中で最強と謳われた眷属。

あれは…あの動きは…あの構えは——

「ゼウス・ファミリア団長 レベル8 【英傑】^{マキシム} …！」

入団試験②

「——じゃあ、僕が最後の英雄になる。」

気づけば、そんな言葉を口にしていて。お義母さんは、嘆いているようだった。自分がオラリオに行かなければ——あの冥府かみさの神まについて行かなければ、”さいごのえいゆう”が現れないと。

「——だから……………お母さんっ」

別れないで。ずっと一緒に、、そんな感情をうちに込めた僕の言葉に、お母さんは少し笑った。消えてしまいそうな、ほんの少しの微笑。驚いたような、嬉しいような。

「……………生意気な子供め、私の前で英雄などのたまったからには、覚悟しておけよ?」

にやりと、嬉しさを隠すように言ったその言葉に、僕は頬を綻はばせた。

嬉しかったのだ。他ならない母が、自分の言葉で喜んでくれたことを。

「今夜から訓練をはじめよう。準備はいいか?」

「こんや!」

「重りをつけて川に沈め、死の感覚を覚えさせるか、龍の谷に落として理不尽を知ることから始めるか、」

目を瞑り楽しそうに物騒なことを言い出し、冷や汗をかくベルだったが、後悔はしない。取り消しも。どんなに辛い道でも、ベルは諦めない。

—— だから僕は、この日の決意と、母の笑顔は生涯忘れないだろう。理想を追い求めて生まれた、愛している人の笑顔を、

△ △ △ △

黄昏の館、中庭

今も乱戦闘技は続いている。

バトルロワイヤル

(お義母さんから教えてもらったこの剣技——本人は、知り合いの猿真似だ、なんて言ってたけど、そのレベルは凄まじい。視線で相手を誘導し、剣で相手の軌道をずらす。今もこの剣技が上手くはまっっている——まだまだお義母さんの技量には届かないけど。)

「おらあ!!」

(下段からの切り上げ——後退でいなして隙を作る。)

相手の行動を読み、静かな、最小限の動きで反撃をする。お義母さんから教わった戦い方。そうやって試合を続けていると、唐突に悪寒が走った。背筋に寒気が走るような感覚。それを感じた瞬間。僕は構えも何もかなくり捨てて地面を蹴っていた。

「——これを避けるか。」

本当に、ただただ相手を感じたかのような、戦場では不釣り合いな酷く余裕のある声が響いた。続いて聞こえるのは轟音。無造作に地面に叩きつけるられるその細い剣は、今までたくさんの血を浴びてきたのか、赤黒く染まっていた。

視線を飛ばすとそこには、最初に話した猫 キャットピール 人の男性が剣を手のひらでくるくると回していた。

——気づけば、この中庭で立っているのは、あの男性と僕だけになっっていた。

「てめえも善戦したみたいだが、諦めな。」

冷徹な——いや、こちらを見下した笑みを浮かべながら顎を上にあげ、僕を見ている。ここが——ここが分水嶺だと。そう感じた。

「俺はレベル2、都市外でレベルを上げた——まだ冒険者じゃねえが、

上級冒険者の括りに入る実力者だ。恩恵の持たないてめえじや相手にならねえよ」

相手の言葉を聞き流しながら見極める。構えは最悪。身のこなしも恐らく、圧倒的な力に身を任せたタイプ。だがそれでも——恐らく正攻法では勝機は無いに等しい。それくらい相手と自分の純然たる力の差はかけ離れていた。

「てめえには万に1つも勝ち目はねえんだよ。恩恵も持たねえ雑魚じやあな。」

そのセリフを言い終わり、一瞬の瞬きと、こちらへの視線が飛んだその瞬間、僕は懐に隠した予備のナイフを相手の背後に投げつけた。

「——はあ?」

こちらの意図を掴みかねるかのように、男性は声を漏らす。わざわざあからさまに相手の背後に投げナイフをした理由、それは——

「——爆弾だ。」

——ブラフを仕掛ける。あまりこういうのは得意じゃないんだけど冒険者になる上で、こういうった心理戦は大切になると、ザルドさんから教えてもらった。なんでも「アルフィアからやれと言われて仕方なく」だそうだ。「俺はパワータイプなんだがな」とも言っていた。ザルドさんからは良く料理も教えて貰ったりしていて、それは僕の得意なことでもある。そんなことはさておいて、今は戦いに集中する。

僕がさつき投げたナイフに爆弾は仕掛けていない。だが、その言葉で隙は稼げる。

「ツツツ!!」

僕の言葉に背後を振り返るその男性の背中に灰色の剣を振り下ろす。男は寸前で気づき、焦って細剣を構え、僕の剣撃を弾き飛ばそうとする。そうしてあの男性が僕の剣に触れる瞬間を狙う、狙う、狙う、

「——ハッ。」

相手の剣と僕の剣が触れ合うその数瞬前、僕は、自身の持つ灰色の剣を手放して相手の鳩尾を蹴り付けた。

「ごおっっ」

ここしかないという完璧な場所に蹴りを入れ、相手は背後に倒れる。すかさず相手の首にこちらの剣を当てて、”げーむえんど”だ。

「降参してください。」

こちらに降参を勧める声に猫^{キャットピーパー}人の男性は顔を真っ赤にして反撃しようとする——不味い。今すぐ首を跳ねなければ、押し飛ばされる。。。

「これ以上はやめておくべきだ。」

知的な声が響いた。翡翠色の眼は、猫人の男性に降り注がれている。

「あんたは、レベル6——九魔姫!？」^{ナインヘル}

第1級冒険者に驚く男性は、信じられないように目を痙攣させた。

「ま、待てっ俺はレベル2だぞ?!俺を採用しなければこの派閥にとつて大きな損だ!!だから止めんじやねえっ。俺は早くこの野郎を倒さなきゃならねえ」

焦ったように弁明し、血走った眼でベル・クラネル^ぶを見てくるその

男性に、九魔姫は——リヴェリアは嘆息した。

「その少年が貴様を害そうとすれば、決着はすぐにつくだろう。これ以上あがくのは見苦しい。残念だが、貴様に合格はあげられない。」

その言葉を聞いて、男性は強引に僕の拘束から抜け出して、こちらを射殺す程の眼力をもって、僕を睨みつけた。

「おあ!？」

「覚えてろよ。この借りはいずれ返す…！」

拘束から抜け出されて、驚いている僕を横目に、その男性は去っていった。リヴェリアさんはひとしきり逃げた男性の背中を見ていたが、不意にこちらに視線を飛ばし、質問をした。

「さて、そちらの少年、名はなんという？」

「ベル・クラネルです。」

「1次試験は合格だ。素晴らしい戦いぶりだったな。研鑽を積んでいたのだとわかる動きをしていた。」

素晴らしいながら、リヴェリアさんはこちらに微笑を向ける。

「2次試験の内容は面接だ。ついてきてくれ。」

そういうと、黄昏の館の建物の中に歩き出した。

建物の中に入りしばらく歩くと、ある扉の前で立ち止まり、その扉を開ける。なんだか神聖——というわけではないけれど、偉い人が居そうな——主神の部屋だというのが一瞬でわかる部屋に入った。

「ロキ、入団希望者を連れてきた。」

部屋の中に入ると、部屋には先程中庭に居たロキ・ファミリア団長のフィンさんと、ドワーフの老戦士——恐らくロキ・ファミリア幹部、レベル6の重傑エルガムガレス・ランドロックさんが居た。

「突然ですまない。最終試験として面接を行なう。1次試験の疲れもあるだろうけど、少し堪忍して欲しい。」

そうして、この部屋に入り、周囲を観察していた僕に告げられるのは、最終試験宣言。こちらを見つめる第一級冒険者達と、都市最大ファミリアの主神に、僕は緊張の汗を流していた。

最終試験

ロキ・ファミアリアの本拠地^{ホーム}、黄昏の館、その最上階の主神ロキの部屋で、僕とロキ・ファミアリア三首領と呼ばれる第一級冒険者が集まっている。

「突然ですまない。最終試験として面接を行なう。1次試験の疲れもあるだろうけど、少し堪忍して欲しい。」

そしてフィンさんは、僕に向かって笑いかけ、面接の開始を告げる。僕は少しの緊張に汗を浮かべつつも、落ち着いた受け答える。

「わかりました。」

「さて、面接についてだけど、内容は簡単だ。僕とガレス、リヴェリア、そしてロキ——僕たちの主神からそれぞれ質問をする。明確に答えなんて無いから安心して受けて欲しい。」

真剣な声色でフィンさんがそう告げると、リヴェリアさんが続けて声を発する。

「さて私から質問をしようか。少年、夢は持っているか?」

片目を瞑り、そう問いかけてくるリヴェリアさんに、僕は「はい。」と答えた。すると続けざまにリヴェリアさんはこちらに問う。

「——冒険者になるのなら、この先何度も窮地に陥ることがあるだろう。その中で折れず、諦めず、夢を追い続ける覚悟はあるか?」

リヴェリアさんは、冒険者になる上での覚悟をこちらに問いかけている。最後まで夢を追い続ける覚悟はあるか。諦めずめげず何があっても——自分の胸に問いかける。自分にその覚悟はあるか、と。その答えは——

「——あります。」

「覚悟の決まった少年やなあ」

ただ、ひとこと。絶対の意思を表明した。そうすると、今まで黙っ

ていた神様——ロキ・ファミリアの主神ロキが面白そうにそう言葉をこぼす。するとリヴェリアさんが一瞬ロキの方に視線を向けた。その後、僕の答えに満足したかのようにリヴェリアさんは目を瞑った。「分かった。私からは以上だ。」

リヴェリアさんが自分の質問の終了を告げると共に、いままで特に喋ることの無かったロキ・ファミリア幹部【重傑】^{エルガラム}——ガレス・ランドロックさんが質問を終えたりヴェリアさんと交代するかのよう
にこちらの目を見て口を開いた。

「お主は、仲間の窮地に命を張って——自身の命を賭けてまで助ける
ことが出来るか？」

ガレスさんの質問はシンプルだった。ドワーフらしく、直球に僕が
ロキ・ファミリアの入る資格があるのか見極めに来ている。”これか
らロキ・ファミリアの仲間の為に命を張れるか”——ともすれば、そ
れは残酷な問いかけかもしれない。シンプルに端的にかけられるそ
の言葉は、真面目に考える人間ほど「いいえ」と答えたくなくなる。——
当然だ。ロキ・ファミリアの仲間など入団希望者にはいないのだけ
ら。実感の無いものの命を賭けられまい。その上、後ろでは子供の嘘
を容易く見破る超越存在^{デウスデア}がにやにやとこちらを見守っている。しか
し、英雄を志す少年の答えは決まっていた。

「助けます。何があろうと。」

英雄を決意した少年に迷いは無い。何より、大神^{ゼウス}に育てられた少年
の精神は、英雄を目指す者として高い域にあった。無論14の少年、
完璧では無いのだが。

しかしその答えに満足したのか【重傑】^{エルガラム}ガレス・ランドロックは鷹揚
に頷いた。先程のリヴェリアさんは主神ロキの方を向き、——恐らく
僕が嘘をついているかどうか確認していたと思う——それから自
分の質問の終わりを告げたが、ガレスさんはロキ様の方を一瞥もせず
に、「これで儂の質問は終わりじゃ。良い答えだった。」と締めくくつ

た。

なんだか、全体的に感触は良い、感じがする。このまま僕の心にあった。質問をしてくれーとちよつと他人任せでお義母さんに怒られそうな願いを頭にうかべていると、フィンさんから話しかけられた。

「さて、僕が次の質問だね。すぐに質問をしたいところだけど、少し話そうか。君も緊張している様子だ。」

そういつてなんてことのないように笑いかけてくるフィンさんに少し肩の荷が降りた。なんとというか、人と話すのに慣れている感じだ。フィンさんは。話すのがとても上手くて、いつの間に残っていた身体のちよつとの緊張は抜けていた。

「君は、ベル・クラネルと言ったかな。このオラリオで生まれたのかい？」

「いえ、僕はオラリオの北西にある村で生まれました。」

「へえ、オラリオに来てからは長いかい？」

僕が答えると、フィンさんは驚いたように問いかけてくる。碧色の瞳からは深い知性を感じさせられて、なんだか聞き上手でもあるみたい。

「いえ。オラリオに来てからは、かなり短いです。」

僕の答えにフィンさんはうんうんと頷き、そして身に纏う雰囲気を変えた。何か目を細めた訳でもない。圧倒的実力者からの本気の眼差し。神様の目があることを差し引いても、一切の嘘や誤魔化しを許さないそれはお義母さんが偶に見せるものと少し似ていて、一瞬気圧されてしまった。

「君はこのオラリオで何を成したい？冒険の果てに何を望む？」

フィンさんの質問に、気が付くと僕はもう答えを発していた。

「——英雄になる為。」

目を瞑り、自分の決意を告げる。するとフィンさんはその言葉を聞いた後、少し思案して、あっさりと言問は終わった。随分とすぐに言問が終わっちゃったな。と思っていると、横からロキ様が話しかけてきた。

「じゃあ、うちも言問してええか？」

「あ、はい。」

フィンさんとはうってかわってすごく軽い感じで声をかける糸目で赤髪の神様——ロキ様は僕に言問をする。

「少年にとって、英雄ってなんや？」

英雄とは、なにか。そんなものは簡単だ。僕にとって、英雄とはお義母さんであり、お爺ちゃんであり、ザルドさんだ。——しかしこの人たちはお義母さんのことを知らない。お義母さんはこの人に劣らないほどすごく強いからもしかしたら面識とかあるかもしれないけど、この状況でそんな確認は無粋だろう。ロキ様は僕の覚悟の中を探ろうとしているのだから。

「僕の憧れの人みたいに、雷霆のように駆けつけて、女の子を救う。どこに居ても相手がどんなに強くても。自分を賭して立ち向かえるよ
うな——」

僕の想いを告げていく、僕の価値観を、僕の人生を、神様に知ってもらう。

「——そして、黒竜^{リゅう}を倒す。最後の英雄」が、僕のなりたい英雄です。」

決意の丈を告げる。お義母さんとむすんだ何もかもが高すぎる約束。それでも、この想いに一切の揺らぎは無い。僕の答えにロキ様は満足したようだった。

「本気で言つとる。神として相対しとるうちやから分かる。」

その答えにはフィンさんは笑い、ロキ様に声をかける。

「それでロキ？沙汰は？」

「勿論合格や。冒険者としても人間としても気に入った。今日からロキ・ファミリアやで。」

「あ、ありがとうございます！」

「けっこう緊張した。やっぱり第一級冒険者や超越存在デウスデアは貫禄というか、雰囲気が違う、まるでお義母さんかのように。」

「それでも、無事合格出来た。ここから僕の英雄譚が始まるんだ、！」

△ △ △ △

「英雄に成る、か。。。」

「フィン少年の言葉を口にしていた。」

「今、小人族バルウムの勇者えいゆうとして名をあげているフィンおまえの前で英雄になりた
いと言うなんて、余程の覚悟があると見える。」

「リヴェリア・リヨス・アールヴは、そう呟いた。」

「面白い子や。楽しくなりそうやなあ」とロキは言う。

「何にしても、恐らくあの少年は強くなるよ。勘だけどね。」

「フィン自分の親指を舐め、そう零した。」

ロキ・ファミアリア

「これで今日からベルもロキ・ファミアリアや。」

僕は今、上半身だけ裸になってうつつ伏せで寝っ転がっている。その上に跨るようになって乗っているのは、たった今僕の背中に”恩恵”を刻んだロキ・ファミアリア——僕の主神となったロキ様である

「はい、これがステイタスをまとめた用紙やな。」

ロキはそう言いながら共通語コイネで書かれた用紙を僕に渡した。

ベル・クラネル

ステイタス

L v. 1

力 : I 0

耐久 : I 0

器用 : I 0

敏捷 : I 0

魔力 : I 0

スキル

アル・テレステオ
【英雄決意】

・
・
・ 強敵戦闘時、全能力値アビリティに超高補正。

魔法

【オーバーイート・ヴェーリオン】

詠唱 アブソブション
【魂の食事】

付与魔法。魔法及び魔力の完全吸収。

ブロンテス
【雷鳴】

詠唱 ルファイア
【鳴り響け】

「魔法、魔法がある!!」

ステイタスを移された用紙に目を向けると、そこには憧れの魔法が記されていた。お義母さんみたいな超短文詠唱の!!

「はつきり言うけど、そのステイタス異常や」

僕が発現した魔法に喜び、心を震わせていると唐突に声をかけるロキ様がにやにやとしながら少し冷や汗を浮かべながらこちらにこえをかけてきた。

「あの、異常って、?」

「魔法種族でもない人間族が恩恵を授かってその日にスキル1つと魔法2つ。これは通常じゃ有り得んことや。」

「これも下界の未知やなあ」と呟きながらロキ様は笑ってる。びつくりした。何か飛びつきりの地雷スキルだったのかと。。。

「何にしてもどれもええスキルや。他の人にはバラすんやないで?」
「勿論です。」

ステイタスの覗き見やバレは冒険者にとって致命的。これはザルドさんやお義母さんから、ステイタスを刻まれていない時から口を酸っぱくして言われたことだ。レアスキル持ちは狙われやすい。

「まあ、見た感じ僕のスキルは特別なレアスキルでは無さそうですね」

「———そうやなあ。それでも他言無用やで?」

「分かりました!」

僕が返事を返すとロキ様はうんうんと頷き、そして退出を促した。なんでもこれからちよつとした話し合いがあるみたい。

「他の子にも挨拶しときいー」

「はい!!」

そうして僕は恩恵を刻まれたその体で、ロキ・ファミリアの仲間に挨拶に行くのだった。

△ △ △ △

ロキ・ファミリア本拠地最上階、ロキの部屋。新しくファミリアに

加入した白い少年が部屋から出たあと、ロキは長い、それは長い溜息をはいた。

「フィン、この子有望すぎるぞ。」

ロキの言葉にフィンは訝しげに首をまげ、ロキから手渡された更新用紙に目を通した。

スキル

アル・テレステオ

【英雄決意】

- ・早熟する
- ・決意の丈により効果上昇
- ・強敵戦闘時、全能力値に超高補正。アレリテイ

魔法

【オーバーイート・ヴェーリオン】

アブソブション

詠唱【魂の食事】

付与魔法。魔法及び魔力の完全吸収。

【雷鳴】

ブロンテス

詠唱【鳴り響け】

ルファイア

「——馬鹿げているね。」

「な、」

「これは、」

続く、リヴェリア、ガレスも同じように更新用紙を見ると皆同じように目を見開き、驚きの声を漏らす。

マジックユーズ

「魔法種族でもない人間が魔法を2つ。スキルがひとつ。恩恵を受

ヒューマン

けてすぐ。これだけでもおかしいののうち2つは と希少魔法だ。

レアマジック

スキルにいたっては”成長速度の増加”だなんて馬鹿みたいな性能。

これがバレたら荒れるね。」

フィンの洞察にリヴェリアは頷いた。

「ロキ・ファミアに加入していることは未知を好む厄介な神を避けることになるがそれでもやはり不十分だ。」

リヴェエリアは頭痛をこらえるようにその更新用紙を見ている。ガレスも続けて口を開く。

「少し前もロキ・ファミリアに喧嘩を仕掛けおったファミリアがあった。いくら強くとも娯楽好きの神の前には問題にならない。」

そう。どんなにロキ・ファミリアが強大な派閥であろうと、頭のおかしい神は攻めてくるしなんなら勧誘もしてくる。誘拐までありうる。

「ロキ、スキルについては、」

「ああ、当人には言つとらんで。純粹そうやからなあ。」

フィンの問いかけにロキは当然とうなずいた。その答えにガレスは疑問を挟む。

「純粹そうか。いや確かにそのように見えはするが中庭での立ち回りは熟練な狡猾さを感じられたぞ。まだまだひよっこじゃがな。」

ガレスの疑問に答えるのはフィンだ。

「シー、恐らくあの少年は何者かから戦闘の師事を受けていたのだろうね。でなければああは動けまい。あのブラフも戦闘時のみだけだろう。あの戦略的な動きは日常生活では出来ないだろうね。」

フィンはそこまで自分の考察を言い切った後、本題を切り出した。

「恐らく彼の師匠は、ゼウス・ファミリアかヘラ・ファミリアだ。」

「……！」

三者は目を見開く。かの最強の派閥に生き残りがいるなど、到底信じられることではないからだ。

「待てフィン、双ファミリアは黒竜によって全滅したはずだ。それに生き残りも暗黒期の時に無くなったはず。」

——そう。今から何年か前の暗黒期。オラリオが闇に包まれていた時の『死の7日間』ゼウス・ファミリア、ヘラ・ファミリアの幹部が襲ってきたのだ。

「僕は黒竜討伐の際、サポーターとして同行した。故に見たことがある。英傑さいぎょうの剣技を。極端な話。ずっと近くで見えてきた他のメンバーなら教えられないこともないだろう。」

——その実態は才禍アアルファイアの怪物の完全模倣なのだがフィン達には知る由もない。

「最強の派閥の生き残り、か。」

「どうやらとんでもない逸材を入れてもうたかもしれないなあ」
道化は楽しそうに笑い、下界の未知に心を躍らせた。

教育係

「教育係？」

中肉中背のいかにも冴えない普通の男。所謂ロキ・ファミリアの第2軍である【超凡夫^{ハイノビース}】ラウル・ノールドは、フィンの言葉にそう聞き返していた。

「そう。新しく入った団員、ベルの教育係を君に任せたい。」

そのフィンの言葉にラウルは目を丸くした。まだまだひよつこな自分に教育係などとても無理だとしてもいうかのように。実際はレベル4であるラウルはオラリオでも最上位^{トップクラス}であり、他派閥の団長になれるくらいのものであるのだが、第一級^{真性の化け物}冒険者普段から囲まれるラウルの自己肯定感が低かった。

「なんで自分に？」

だから、ラウルにとってはその申し出は謎だった。しかしフィンから次代の団長として期待を寄せられている彼は困惑はあれど能力不足はない

「ンー、理由は色々あるんだが、1つは当然の成り行きの話だ。とても有望な新人が入ったが第一級^{僕達}冒険者が面倒を見るのは響を買いかねない。」

「それに、君には次の団長も考えている。後輩を育てる良い機会になるだろう。」

「団長つすか。」

恐れ多いとばかりにそう言葉を返すが、ラウルは以前からフィンの”次期団長になってほしい”という思いは聞いていた。団長であるフィンに逆らえず——というよりフィンの言葉を否定する意味も特になかったのでラウルは了承した。

△ △ △ △ △

オラリオの街中、ガヤガヤとした喧騒が周囲にあるがなんてことは

無い。世界の中心たるこの迷宮都市は、いつもこの様相である。そこで、ラウル・ノールドと、ベル・クラネルは歩いていった。ベルの教育係として任されたラウルは、早速ベルの冒険者登録に付き添いに来たのだ。

「さて、見えるつすか？あれがギルドつす。」

そういつてラウル達は、ギルドの内まで来た。ギルドは冒険者や魔石、ドロップアイテムなど様々な者の管理をしており 冒険者はここに登録することで、迷宮に入る許可と、様々な支援を受けられる。そうこうしていると、ギルド受付であるハーフェルフの女性にラウルが声をかけた。

「冒険者登録をお願いしたいつす。」

そういつてラウルは登録を始めた。憧れの冒険者になれるドキドキする出来事だったけど、割とトントン拍子に話は進んで、気づいたら登録は終わっていた。

「えっと、これからダンジョンに潜るんですか？」

登録を終えたラウルにベルが声をかける。その言葉にラウルは振り返り返事をする。

「いや、武器を買いに行くつす。ベルは既に剣を持つてるつすけど、ダンジョンでは何が起こるか分からない。予備の武器スベアを持つておくに越したことはないつす。」

武器

「……」

ベルは言葉を失い、目を輝かせてその武器を眺めていた。現在、^{パベル}神塔の鍛冶系最高ファミリアと名高い「ヘファイストス・ファミリア」のテナントで武器を探していた。初めはそんな有名に派閥の武器なんて……と恐れ遠ざかっていたが、ここではレベル1、「鍛冶」のアビリティを持っていない鍛冶師の作品が飾られる。下級冒険者でも手を出せる武器を売ること、冒険者全体の武器の質が上がり、またその冒険者からフィードバックを発奮剤に鍛冶師もまた腕を上げるのだ。

「こんな武器が、あつこれすごい!!」

ベルはあちこち見て周り武器を凝視する。恩恵なしでレベル2を倒して見せたこの男も、14歳の少年なのだ。この武器の質はお世辞にもいいものとは言えないが、レベル1にしては業物ばかりであり、ベルの持つ灰色の剣と比べても遜色ないものであった。——実はこの剣はアルフィアがベルと別れる前に渡したものである。本人の実力向上のために質はレベル1相当までに抑え、やや頑丈なものを用意した。ベルはそれを毎日研いで使っている。

そんな風に武器を見ていると、ある1つの武器に目を吸い寄せられた。

「——これ。」

ベルは瞬きをするのも忘れその短剣を見つめていた。それは先程まで見ていたようなこちらをワクワクさせるような豪華さ、派手さはない。しかしそれでもベルはこの短剣が気に入った。白く装飾の施されていないが、そのシンプルさ——否、その短剣にあるナニカにベルは心を奪われた。

「ヴェルフ・クロツゾ」

覚えた。僕の心を掴んで離さない鍛冶師の名前。これを買おう。

「決まったつすか?」

後ろからラウルさんが声をかけてくる。それに振り返ると同時に
あることに気づく。ラウルさんも軽量鎧ライト・アーマーなど、防具をいくつか持っ
てこちらに向かってきた。

「冒険者は、防具も必要です。死角からの攻撃。避けられない攻撃の
防御。防具は身を守る手段ですから。」

そういつて、どの防具が良いか促すように手に持つてる防具をこち
らにみせた。すると先程と同じように、ある防具に強く惹かれた。背
中の恩恵のスキル欄が熱く燃焼するようにこの防具の存在に魅了さ
れている。

「ん？どうしたんっすか？」

しばらくその防具を、その鍛冶師の名をみつめているとラウルさん
が不思議そうに問いかける。

「——これに、この防具にします。」

白くて、少し灰色がかっているその防具に僕は自分の命を任せるこ
とにしたのだった。

初めてのダンジョン。初めての魔法。

目の前で剣が舞うように振るわれる。自分と同じくらいの背丈のモンスターに対して、その少年は恐れることなく潜り込み、掠ればかなり大きな怪我を受けるような鋭い爪を危なげなく躲している。

「(これほどは、予想外です。団長……!)」

現在ダンジョン6階層

ギルドの定める適正ステータスはレベル1のG<F。

たった昨日恩恵を受けた新人が間違っても足を踏み入れてはならない場所である。

フィンからベルの教育係を承ったラウルは、ダンジョンの空気を教えるため、とりあえず2階層まで、調子が良いようなら3階層を見せあげようと思っていたが、この結果は予想外であった。

「終わりました。ラウルさん!!」

ウオーシヤドゥウ
新米殺し3匹をしれつと倒してこちらに駆け寄るベルにラウルは声をかけた。

「もしかしてベル、ダンジョンに入った経験あるんすか?」

半ば確信的に尋ねたラウルだったが、困ったように眉を下げて否定される。

「ダンジョンに入ったことにはないですけど、僕の親代わりの人が元冒険者だったので色々教えてくれたんです。ラウルさん、もう帰りますか?」

挙句にこれだ。初めて入ったダンジョンをトントン拍子で進めているにも関わらず、まるで慢心がない。普通の新人ならもう少し下の階層を進みたくならるところだろうに。

「そうっすね。ダンジョンにも適応してるみたいっすし、そろそろ帰っても良いっす。」

「あの、ラウルさん、魔法、試しても良いですか?」

ベルはおずおずと目を輝かせて、こちらに問う。そういえば、魔法も発現していたのだった、とラウルは魔法の存在を忘れかけていたことを思い出し、許可した。

「子供っぽいところもあるんすね。」

あまりの規格外さに、教育係として自信を無くしかけていたらラウルも、魔法を前にワクワクしている子供のような姿に、微笑ましさを覚える。

△ △ △ △

目を閉じる。己の中にある今まで感じたことのなかったなにかを
手に集め、詠唱する。

【鳴り響け】——【雷鳴】

瞬間放たれるのは、雷鳴。雷の矢とともに、不可視の音塊が指向性
をもってベルの正面へと放たれる。

目の前から飛び出してきた黒い影は、その雷矢に着弾。そして耳
から血を流し気絶した。身体の表面が焼け焦げて、焦げ特有の匂いが
漂ってくる。ほどなくしてこの怪物は、全身が灰になり、崩れるよ
うにして消えた。

「お義母さんの魔法——！」